



Member Introduction

国立大学法人 千葉大学

農学博士 後藤英司

後藤英司。植物工場業界でその名を知らない者はいないと言われるほど、業界の発展に貢献してきた。しかしながらその情熱の根元には何があるのか、どのような道を歩まれたのか。それらを知る機会是非常に少ない。そこで直接千葉大学に赴き、後藤先生の半生に迫った。

■四面楚歌からはじまった植物工場研究

――さて、東京大学の学部生の頃から施設園芸を中心に研究をされていた後藤先生ですが、植物工場をテーマにされたのはどんなきっかけがあったのでしょうか

当時師事していた高倉直教授から「これからは『植物工場』をテーマに研究してほしい。この先、増えていくから」と告げられたんですよ。私がまだ20代ですから1980年代前半。ずっと温室環境での栽培研究をメインストリームでやってきて、植物工場なんてまさか。これから増えると言われても民間事例も研究実績もない。正直、これは「はずされたな」と思いました(笑)。



基本的には既存農業を大切にする学部ですから、論文審査会なんて酷いものです。「これが農家のためになるのか?」「工場って言うけどここは農学部だ。魂を売るのか!」なんて。まさに四面楚歌ですよ。「引用文献を示すべきだ!」なんて言われても、当時植物工場の研究実績なんてないんですから。とにかくこういう生産が必要になると主張するしかなかったですね。

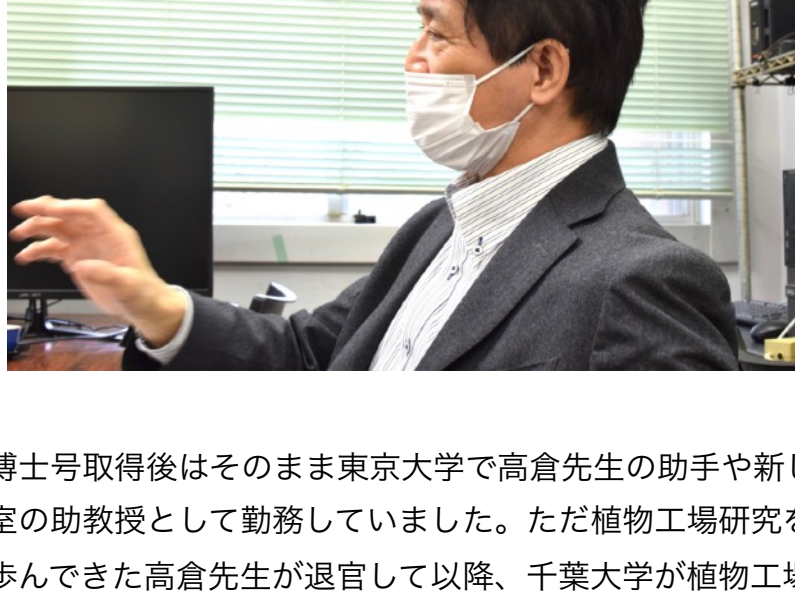
――茨の道から始まった後藤先生の植物工場研究人生ですが、どうやってモチベーションを保ち、そして乗り越えることができたのですか?

研究をする中で、最も可能性を感じたのは「光」のコントロールでした。温室やビニールハウスでも温度や湿度調整はできるが、光はどうしても太陽頼みになる。植物工場では気候に左右されないだけでなく、光の当て方ひとつで野菜の成長も調整できる。そこに圧倒的な違いと、何より面白さがありました。

周囲の理解はなかなか得られなかったですけど、高倉先生の強力な後押しがあったからこそなんとか研究を続けられて、修士課程・博士課程を修了しました。実は植物工場をテーマに修士・博士号双方を取得したのは、私が世界で初めてなんですよ。

――四面楚歌、茨の道を歩き続けて突き抜けたわけですね。まさに植物工場研究のパイオニアと呼ばれる所以が理解できました! その後も研究を続けられていくわけですが、どのようなステップを進まれたのでしょうか。

■千葉大学を植物工場研究の『メッカ』に



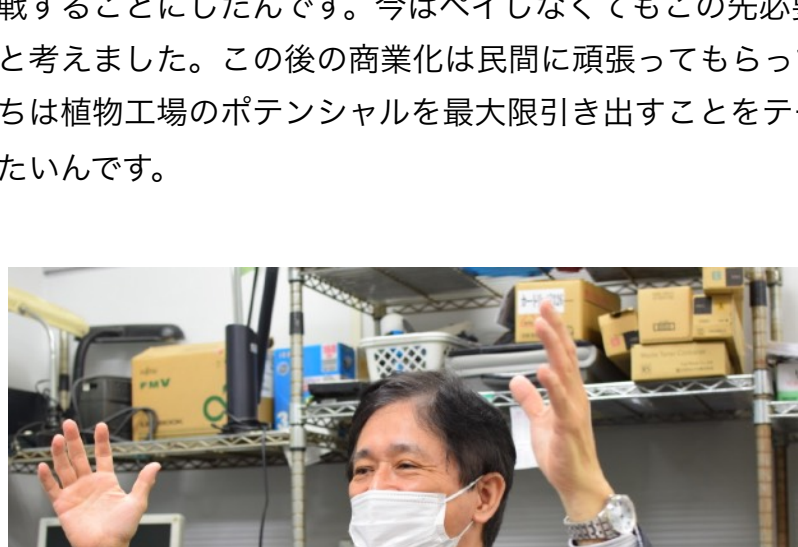
博士号取得後はそのまま東京大学で高倉先生の助手や新しい研究室の助教授として勤務していました。ただ植物工場研究とともに歩んできた高倉先生が退官して以降、千葉大学が植物工場研究の中心地になりました。そこにあったのが古在豊樹先生の研究室。先生は植物工場の研究を強力に牽引されてきた方です。

千葉大学は研究に終始するというより、民間企業での実用化やコスト削減など、現場の課題を直接解決する研究もゴールになっていました。大学で閉じることなく、オープンマインドだったことに加えて、極めつけは「植物工場研究のメッカにしたい」という古在先生の想いに賛同し、私も千葉大学に合流しました。

■レタスに一区切りをつけた教授

――2004年に千葉大学の園芸学部助教授として移られるわけですが、以前と比べて研究環境に変化はありましたか?

2000年代になると国内外で植物工場の認知が上がりまして、研究者も増えました。研究開始当初に比べると大きな進歩ですよ。ただ、商用化の観点から、研究品種はレタスばかりで、世界各国でみんな同じことばかりやってるんですよ。その頃、正直ちょっとレタスの研究に飽きちゃって(笑)。学生時代から20年近くやってましたからね。ほうれん草や小松菜、ハーブ、果菜などに挑戦することにしたんです。今はペイしなくてもこの先必要になると考えました。この後の商業化は民間に頑張ってもらって、私たちは植物工場のポテンシャルを最大限引き出すことをテーマにしたいんです。



レタス研究を夢見て来た学生がショックを受けることもあるという。しかし異分野融合や「植物工場でこんな野菜を作りたい」という企業との共同研究を優先して取り組み、植物工場のポテンシャルを引き出し続けるパイオニア、後藤先生。その視線はいつも産業の数歩先を見つけて来た!

収まり切らなかったインタビューは「後編」に続きます!

――可能性の広がる光の研究から始まりましたが、また新たな可能性の世界に先駆けて追求され続けていくということですね。

■もっと強い業界にするために

研究者って外の人と関わるのを嫌う人もいますね。でも私は積極的な企業とのコラボや実証実験を通して、「実用」に重きを置いてきました。産業協会であるJPFIAには、アカデミックな視点が必要だろうということで、古在先生から託されて参画しています。

中央省庁への働きかけや、工場建設の時に地方行政への申請の場面など、いざという時に業界団体の存在は大きな後ろ盾になりますよね。例えば植物工場におけるJAS規格も業界団体があることで信頼度が上がり、策定につながりました。会員も増えてきていますし、今後も規模が拡大することでより大きな効果が期待できます。私も植物工場の歴史を知るものとして、JPFIAをサポートしていきたいと思っています。

レタス研究を夢見て来た学生がショックを受けることもあるという。しかし異分野融合や「植物工場でこんな野菜を作りたい」という企業との共同研究を優先して取り組み、植物工場のポテンシャルを引き出し続けるパイオニア、後藤先生。その視線はいつも産業の数歩先を見つけて来た!

収まり切らなかったインタビューは「後編」に続きます!

